# JICA VOLUNTEER

## IN BANGLADESH

## জাইকা ভলান্টিয়ার

歴史を回顧することの価値は、郷愁という感興のみではありません。今般、ＪＩＣＡボランティア事業 40 周年を祝すに際して、私たちは、この事業が、私たちが今日見い出している日本とバングラデシュの間の比類なき友情、相互の信頼と尊敬の情を培うことに大きく貢献していることを改めて学ぶことができました。そのようにして得られた素晴らしい資産は、これからの両国間の関係強化に役立つのみならず、双方が手を取り合ってさまざまな国際問題に取り組んでいくためにも使われるべきものです。

頭の中でコンパスを使って円を描いてみましょう。最初の半円は、ボランティアたちが歩んできた歴史です。そして残る半円は、これから、私たちが歩む道です。私たちは、ボランティアの歴史が、必ずしも輝かしい成功のみではなく、真摯に努力をしたけれども叶わなかった夢とそこから得られた教訓で彩られていることを知っています。そこから得られている知見を精一杯活用して、新しい世代の平和と発展のために尽くしましょう。

歴史を祝うことの意義はそこにあると私は信じます。

JICA バングラデシュ事務所長　戸田隆夫



# contents


JICA ボランティア派遣実績 4-5

JICA ボランティアの歩み 6-7

バングラデシュと共に歩み続ける隊員 OB たち 8-13

ベンガル人スタッフが語る、JICA ボランティア 40 年の軌跡 14-15

隊員の一日に密着 16-17

JICA ボランティアの現在
主要セクター別ボランティア活動紹介 18-21

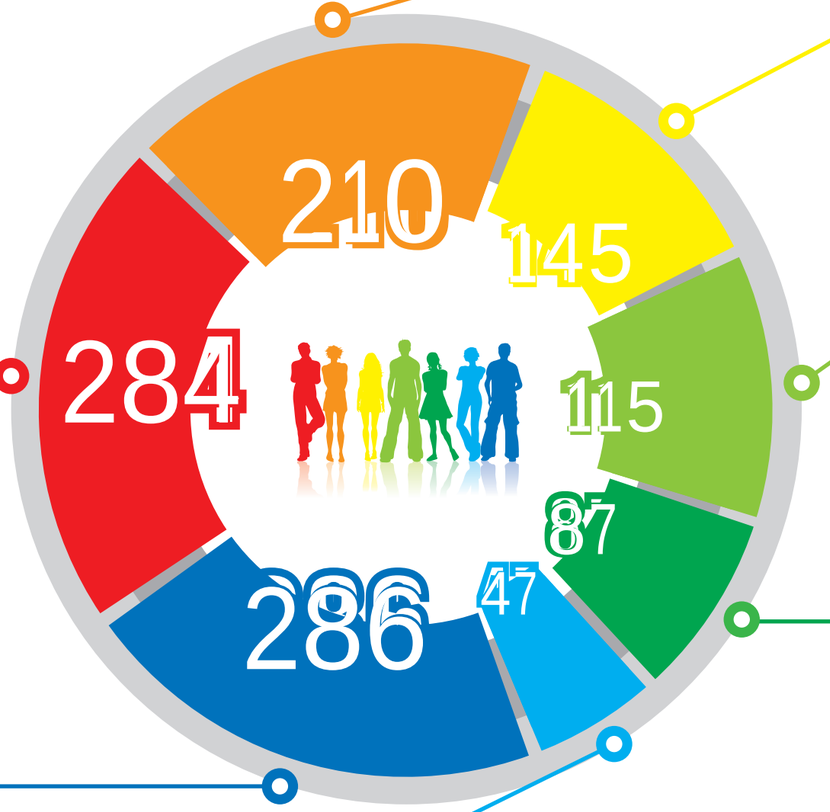
これからの未来に向けて 22-23

OUR CONTRIBUTION

# JICAボランティア派遣実績

## 農業・農村開発分野及び地方行政分野

バングラデシュの食糧問題に取り組むため、これまでに数多くのボランティアが派遣され、稲作、野菜、果樹、きのこ、農業機械などの分野で支援を行った。また、行政サービスと住民のニーズをつなぎ、農村部の発展をすすめるため、技術協力と連携して地方行政の強化に取り組んでいる。その他、西部の地下水ヒ素汚染問題についても、様々なアプローチで支援を行っている。




## 職業訓練分野

バングラデシュ各地にある職業訓練校において、機械工作、電気機器、冷凍機器、自動車整備などの製造分野に携わる人材育成をおこなうボランティアを派遣するとともに、青年開発局や農村開発公社、女性省などに手工芸、染色、PC スキルを指導するボランティアを派遣し、貧困女性の支援にも取り組んでいる。またバングラデシュ国の裾野産業の育成をめざし、モノづくり・カイゼンに関する支援も行っている。

## 保健分野（感染症対策、助産師、看護師等）

保健分野では、全国ポリオワクチン一斉投与 (NID) や通常予防接種の支援を行う活動と、フィラリア症の予防と罹患患者のケアを行うフィラリア症対策に関わる活動を行う感染症対策ボランティアを派遣している。また、妊産婦死亡率の削減のため、村落開発普及員がコミュニティに対する啓発活動を行い、看護師隊員が施設での医療サービス向上に必要な 5S、カイゼン、TQM の指導を行うことで、バングラデシュの母子保健 / 保健システム強化に貢献している。

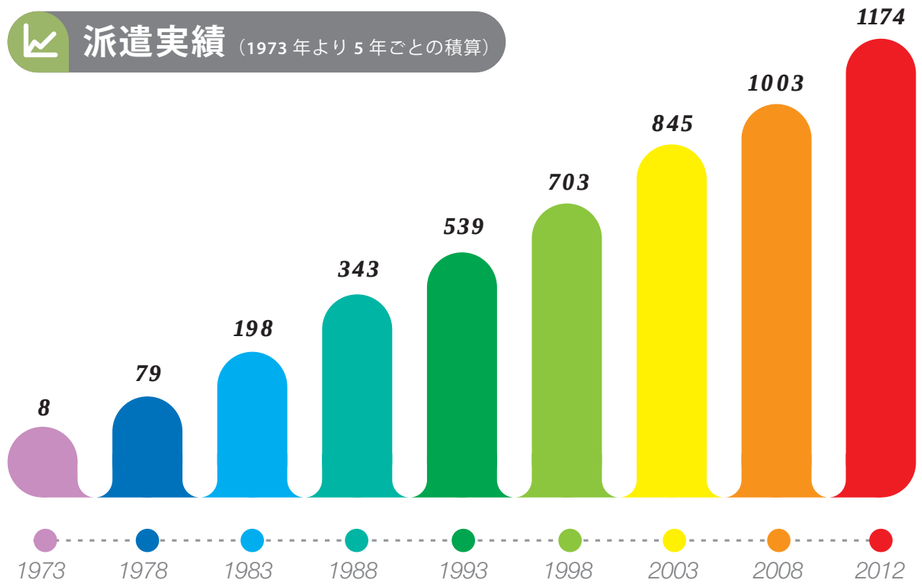
## スポーツ分野

空手や柔道などを指導するボランティアを派遣し、日本の文化を紹介するとともに、武道を通じた人間形成を行ってきた。また、国立スポーツ学院（BKSP）や体育大学、各スポーツ連盟に対しテニス・サッカー・バスケットボール・水泳・ハンドボール・卓球・バドミントン・ボクシング・体操などのボランティアを派遣し、競技者や指導者の技術指導を行い、同時に競技人口の増加に向けた取り組みや大会運営への助言などを行っている。

## 教育分野（小学校教諭、理数科教師等）

暗記中心の授業から子供が考える授業の普及を目指し、JICA 技術協力プロジェクト「小学校理数科教育強化計画」と連携しながら政府系教員養成校へのボランティア派遣を進めるとともに、現地の教育系 NGO へのボランティア派遣を継続して実施し、バングラデシュ国の教育の質の向上を目指した活動を行っている。今後は中等教育分野へのボランティア派遣も開始され、ボランティアによる教育分野への支援の幅を広げながら現場における問題点の解決に取り組む。

## 派遣実績（1973 年より 5 年ごとの積算）




## その他

バングラデシュ政府からの要望に合わせて、放送、建築、在庫管理、体育、日本語教師、環境、料理、観光、経営管理、青少年活動、村落（農村開発・保健以外）など多岐にわたる分野のボランティアが派遣されている。

## IT分野（コンピュータ技術、PCインストラクター等）

職業・技術訓練校において、各種研修コースを通じて、企業で即戦力となる人材の育成を支援している。また、グローバルスタンダードの IT プロフェッショナル育成および民間 IT セクターの更なる発展を目指し、ITEE（情報処理技術者試験）導入のための促進活動を展開するとともに、ICT化を推し進める行政機関において、ウィルス対策、データベース構築、ネットワーク管理等の支援を実施している。さらに、ICT 省に派遣されているシニア海外ボランティアを中心に、現政権公約であるデジタルバングラデシュに関する政策提言をバ国政府に対して行なっている。

HISTORY OVERVIEW

# JICA ボランティアの歩み

W World　B Bangladesh　V JICA Volunteer in Bangladesh

| | 1965 | 1970 | 1975 | 1980 | 1985 |
|---|---|---|---|---|---|
| W | ●1965<br>ベトナム戦争開始。第二次インド・パキスタン戦争。青年海外協力隊（JOCV）創設 | ●1971<br>第三次インド・パキスタン戦争。バングラデシュ独立<br>●1973<br>第４次中東戦争。第一次石油危機<br>●1974<br>国際協力事業団（JICA）設立 | ●1975<br>ベトナム戦争の終結<br>●1977<br>ダッカ日航機ハイジャック事件<br>●1979<br>第二次石油危機 | ●1980<br>イラン・イラク戦争 | ●1986<br>チェルノブイリ原発事故発生<br>●1988<br>イラン・イラク戦争停戦<br>●1989<br>ベルリンの壁の崩壊<br>日本が世界第一位の援助供与国に |
| B | | ●1971<br>独立のための解放戦争<br>●1972<br>イギリス連邦に加盟<br>●1974<br>数万人を犠牲にした大洪水により、大飢饉が発生。国連に加盟 | ●1975<br>シェイク・ムジブル・ラーマン大統領暗殺<br>戒厳令の布告<br>●1977<br>ジアウル・ラーマンが大統領に<br>●1979<br>戒厳令の解除 | ●1981<br>ジアウル・ラーマン大統領暗殺<br>●1983<br>フセイン・ムハンマド・エルシャドが大統領に | ●1987<br>反対派のデモ・ストライキにより非常事態宣言<br>●1988<br>国土の 75% を覆う大洪水が発生 |
| V | | ●1973<br>３名の初代ボランティア派遣<br>●1975 年前後<br>隊員主導の農民支援プロジェクトにより、米の種苗を配布し、自力での米の栽培が可能に | ●1979<br>灌漑用に手押しポンプを導入。各地域で普及を図ったことで、スイカやキュウリ、大根などの栽培が可能に。また、隊員により国内でのキノコ栽培が開始 | ●1980<br>職業訓練校へのボランティア派遣スタート<br>●1981<br>初の女性隊員派遣。スポーツ分野へのボランティア派遣スタート | ●1983<br>隊員機関誌「ショナールバングラ」発刊<br>●1986<br>医療の底上げのため看護師などの隊員を派遣<br>●1989<br>結核対策の隊員を派遣開始。手工芸展示販売店カルポリ設立。 |

**1980 年代**
農業指導及び手工芸品、被服製作指導により女性の収入向上を図ったことにより、家庭内や地域社会での地位が向上（人形、コースター、ココナツボタンなど）。学術系隊員（文化人類学、社会学、農業経済学）の派遣が活発になる。

1 手押しポンプを灌漑用に導入　2 隊員が紹介した甘いスイカ　3 隊員が紹介した太い「タサキ大根」　4 キノコ栽培の様子
5 自動車整備の隊員　6 隊員が制作した人形　7 カルポリ名物ゾウのコースターは隊員がデザイン　8 PC インストラクター

| | 1990 | 1995 | 2000 | 2005 | 2010 | 2013 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| W | ●1991<br>湾岸戦争 | ●1995<br>阪神淡路大震災<br>●1997<br>京都議定書の採択<br>●1999<br>ユネスコが国際母語デーを制定 | ●2000<br>国連ミレニアム・サミット開催、ミレニアム開発目標の策定<br>●2001<br>米国で同時多発テロ（9.11）発生<br>●2003<br>イラク戦争 | | ●2012<br>東日本大震災 | |
| B | ●1990<br>エルシャド大統領退任により軍事政権が終了<br>●1991<br>議院内閣制へと体制を変更。大規模なサイクロンが発生し、津波により十数万人が犠牲に | ●1998<br>国土の 75% を覆う大洪水が発生 | | ●2006<br>グラミン銀行のムハマド・ユヌス氏ノーベル平和賞受賞<br>●2007<br>選挙直前の暴動により非常事態宣言。サイクロン「シドル」により数千人が犠牲に | ●2010<br>国連がバ国の乳幼児死亡率の大幅な削減に対して賞を授与<br>●2012<br>イスラム教徒の一団がコックスバザールの仏教徒コミュニティーを襲撃。2 タカ貨幣の製造を日本が受注 | |
| V | ●1992<br>ボランティア派遣人数 500 人突破<br>●1995<br>看護師、助産師などのボランティア派遣開始により母子保健分野に参画 | ●1990 年代後半<br>理数科教師育成のため、初等教員訓練校（PTI）などへのボランティア派遣スタート<br>●1996<br>初代シニアボランティア派遣 | ●2000<br>ポリオの対策や予防接種拡大計画（EPI）に参画。IT 分野へのボランティア派遣が増加<br>●2004<br>フィラリア対策に参加 | ●2006<br>ダッカ南・北市役所に環境教育のボランティア派遣開始<br>●2008<br>啓発のための人形劇団「チリヤカナ」結成<br>●2009<br>ボランティア派遣人数 1000 人突破 | ●2012<br>日バ外交関係樹立 40 周年を記念し、ベンガル人と隊員による記念ソングを制作<br>●2013<br>南アジアバスケットボール大会で、歴代の隊員が指導した選手数名のチームが優勝 | |

**1990 年代**
政府の無償資金協力と連携して隊員を派遣するやり方が増加。

**洪水被害**
JICA をはじめとする機関の気象レーダー、サイクロンシェルター建設などにより、サイクロンの被害は年々減少。

9 母性保護の活動に取り組む村落隊員　10 教員の卵を教える PTI 隊員　11 空手の南アジア大会で優勝　12 村を巡回する EPI 隊員
13 啓発活動をする環境教育の隊員　14 隊員有志による劇団チリヤカナ　15 1,000 人記念式典　16 国立スポーツ学院のバスケットボール隊員

OB INTERVIEW

# バングラデシュと共に歩み続ける隊員OBたち

家政

## 栄養改善から始まったジョソールとの生涯の繋がり

馬上美恵子
慎司

Profile

*Mieko Magami*
職種：家政
隊次：昭和57年3次隊
*Shinji Magami*
職種：家畜飼育
隊次：昭和58年3次隊
任地：ジョソール県シャシャ郡
配属先：バングラデシュ
農村開発局（BRDB）

Past（美恵子さん）

私と同じBRDB配属の野菜隊員1名、家畜飼育隊員1名とともに、農村を巡回しながら大豆の普及、調理方法の指導、ビタミン・タンパク質キャンペーンなどを実施。また、女性たちの経済的自立を目的として、バングラデシュの伝統的なノクシカタ刺繍の職業訓練も行いました。

Past（慎司さん）

上記の栄養改善に加え、家畜の飼育改善と病気予防を目的として、家畜事務所・病院と共に牧草（ネピアグラス）の栽培、ワクチンの接種を実施。また、週1回の割合で、農民組合、女性組合、貧農組合の人々に家畜飼育セミナーも行いました。

Present

私たちを含む有志でNGO「日本・バングラデシュ文化交流会（JBCEA）」を立ち上げ、持続可能なシステムを作り、小学校に給食を提供するプロジェクト、大豆栽培の技術指導と加工食品を作るプロジェクト、職業訓練を通じて女性たちの自立を支援するプロジェクトの三つを主に行っています。

### 当時の活動

私が青年海外協力隊として派遣される前、BRDBには「女性の現金収入を確保することで、農村女性の地位を向上し、栄養改善にも繋げる」という若干漠然とした要望がありました。そこで、当時BRDBで活動していた野菜隊員が、「栄養知識を持ち、未整備の環境でも調理指導ができる家政隊員」の必要性を感じ、私の要請が上がることになりました。

赴任後は、2名の野菜隊員（前任の佐藤智子さん、後任の増子朋恵さん）と共に農村部が抱える具体的な問題を調査した上で、活動内容を一つ一つ決めるところからスタート。そのうち、現夫で家畜飼育隊員の馬上慎司も加わって、栄養改善のための活動に着手することになりました。

### たどり着いた「栄養改善」の道

この活動は①伝統的な作物の見直しと新しい作物の普及、②良質なたんぱく質を多く含む大豆の栽培とそれを一般の食事に取り入れてもらうための普及といった二本柱で行われました。その際、バングラデシュの専門機関であるダッカ大学の栄養研究所や、長年にわたり大豆栽培のプロジェクトを行っていた米国のNGO「メノナイト・セントラル・コミッティー（MCC）」などの協力も得られたのは、とても心強かったです。またこの他に、農村女性を対象として、バングラデシュの伝統的な刺繍であるノクシカタの職業訓練を行い、彼女たちの収入の創出に繋げていきました。

### シモン君との出会い

1984年、私たちは生後10か月になるシモンくんとそのお母さんに出会いました。お母さんは金銭的な理由から、6歳の長女にシモン君を預け、日中は道路作りをする日雇いの仕事に出かけていたのです。そのため、十分なケアが施されなかったシモン君は病気になってしまいました。私たちはお母さんに、すぐに病院へ連れて行くことを勧め、体を清潔に保つように伝え、身近にある食品（大豆）を使った栄養改善にも一緒に取り組み始めました。このように活動中、村の人たちの栄養や衛生の問題、病気の深刻さを目の当たりにし、とても三年間の任期（一年延長）で解決できることではないと痛感しました。というのも、これらの問題は、村人の知識不足、貧困などに深く起因していて、非常に根深いものだからです。特に栄養改善に至っては一朝一夕で成果が出るものではないので、私自身、10年、20年のスパンで取り組みたいと考え、任地であるジョソール、シャシャ郡で生涯取り組み続けることを決心しました。

### 結婚、そしてNGOの立ち上げ

1986年2月、私たちは協力隊の任期を終え、日本へ帰国しました。そして同年5月に結婚し、夫婦でバングラデシュの文化紹介、講演会などの活動を日本全国で行いました。また、バングラデシュの食文化の紹介も10年間にわたって行いながら、定期的にジョソールへ赴き、様々な交流、協力活動を実施しました。そして1996年に有志が集まり、馬上慎司を代表としてNGO「日本・バングラデシュ文化交流会（JBCEA）」を設立。これまで15年以上にわたり、現地スタッフと共に様々な活動を行っています。協力隊時代に出会ったシモン君との関わりも継続。栄養改善によって順調に成長したシモン君は現在30歳になり、長距離トラックの運転手をしています。私たちは彼の話を通して、栄養バランス、保健衛生、大豆の大切さを農村部の人たちに伝えています。

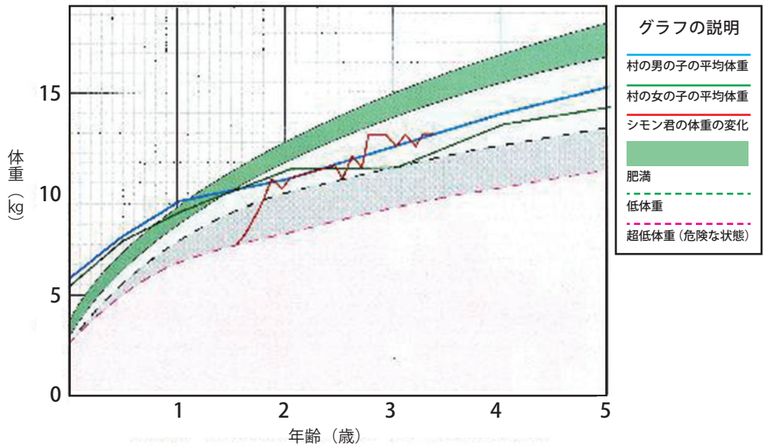
### 一から始まった学校給食プロジェクト

JBCEAでは現地スタッフと共に様々なプロジェクトを行っているのですが、主に小学校向けに学校給食を提供する取り組みもその一つです。このプロジェクトが始まったのはここ数年のことなのですが、これは2003年に活動評価を行った際、特に5歳から14歳の子どもたちの栄養状態が良くないことが分かったため、栄養バランスが整った学校給食の必要性を考えるようになったのです。そこから、調理場を作ったり、調理人のトレーニングを行ったり、政府、学校、保護者、地域住民に給食の必要性を呼びかけたりと地道な努力を重ね、2010年に、シャシャ郡にある最初の学校で給食の提供がスタートしました。現在は3校に給食システムが導入されています。今後、持続可能な学校給食システムをバングラデシュ全土で展開してもらえるよう、日本とバングラデシュの関係機関に働きかけを行っています。

シモン君2歳　元気になったシモン君

シモン君5歳　協力隊員終了後も活動を継続

シモン君の成長記録（比較表）




### これからもこの国の人たちと共に

バングラデシュに来ると、忍耐、根気のある村の女性たちに、すばらしいなぁと感じ、朝早くから、良く働く男性たちだなぁと感じます。私に元気と刺激をくれる人々がいる国です。そして夫にとっては、噛めば噛むほどいろいろな味のする国、やればやるほど悩ませてくれる国、大嫌いと思っても別れられない変な国。訪れるたびに様々な表情を見せてくれるこの国に、私たちは生涯携わっていきます。

１９８５年１２月１０日オープニングに、１００本の風船を飛ばそう！！　馬上慎司が提案、実現。建物完成までに、実に多くのことがありました。いろいろな思いを１００個の風船と共に、バングラデシュの大空に飛ばしました。

# 染色

## コックスバザールで出会った たくさんの笑顔のために

## 馬場節子

Profile

Setsuko Baba

職種：染色
隊次：昭和 63 年度 3 次隊
任地：ダッカ
配属先：婦人局（D.W.A.）

### Past

女性の生活改善と質の向上、教育の機会の提供などを目的とした婦人局に配属。ミシン刺繍、縫製、皮革、染色などのクラスを持つ首都の技術教室で染色の指導者として活動していました。

### Present

バングラデシュの少数民族であるラカインの「教育・文化」と「環境保護」支援を目的とした NGO「A&A」の代表を務めています。A&A は、ラカイン語の「赤」と「緑」の頭文字を取ったもの。形あるものを残すより、交流を大切にしようという意志のもと、現地の人のニーズに合わせた様々な活動を現地の人とともに行っています。

A&A 制作の 2013 年カレンダー表紙

このカレンダーの収益金はバングラデシュ南東部のマングローブ植林活動費になります。ベンガル語の教材にもしていきたいと企画中。

### 当時の活動

1989 年に染色の指導者として赴任した私は、技術指導によって女性の現金収入の道を開くことを目的とし、女性のカウンターパートとともに活動を始めました。彼女は、蝋結染めや、絞り染め（布の一部を縛るなどして模様を作り出す技法）の指導を担当していたので、私は要請にあったシルクスクリーンプリント（版画のようにデザインを写す技法）や、バングラデシュの草木を使った天然染色の技術を教えることにしました。ただ当時、指導書はありませんでしたので、染色の基本となるデータの収集から教科書の原稿作りまでを行い、それを配属先に残しました。

### ラカインの人たちとの出会い

染織隊員として活動する中で、地方の織物や手工芸品などもよく見て回っていたのですが、ある日、先輩隊員からコックスバザールで暮らす少数民族ラカインの織物の工房を紹介してもらいました。ベンガル人のハネムーンのメッカである海沿いの町コックスバザールに暮らす彼らは、仏教を信仰し、私たち日本人に近いアジア系の顔立ちをしています。身に着ける物や食事など独自の生活習慣と文化を保っており、手工芸品もとてもユニークで豊かさを備えているのです。その時からラカイン族の人たちとの交流が始まり、ホームステイやお祭りへの参加などを通じて、さらに親睦を深めました。

### 天災をきっかけに生まれた交流

二年間の任期が終了し、1991 年 4 月末に日本へ帰国したのですが、その直後、巨大サイクロンがラカイン族の暮らすコックスバザールを襲来し、彼らの集落が大打撃を受けたという話を聞きました。その時は何もできなかったのですが、後に現地の方々と連絡を取り合ったり、来日したラカインの友人を通じたりして、コックスバザールの人たちとの交流が続いて行きました。

### ラカインの人たちとともに歩む人生

数年後、青年海外協力隊事務局が発行する広報誌「クロスロード」編集室に職を移し、雑誌の編集と、年に数回の海外取材などを行いました。その後「若者に、自分が見てきた海外の姿を伝え、またボランティアに興味がある人の力になりたい」という思いで、日本外国語専門学校の国際ボランティア科の教師として就任。海外研修先として、これまで交流のあったバングラデシュのラカイン族の村を訪問し、毎年 30 名程度の学生と一緒にホームステイをさせてもらいました。2007 年にはバングラデシュに関心を持つ学生たちとともに NGO「A&A」を設立し、教師の職を辞すことに。活動内容としては、現地訪問に加えて、車いすの寄付、絵本の送付、井戸掘りや水害への物資提供、マングローブの植樹など、必要に応じた支援を行っています。そんな私にとってのバングラデシュは、懐かしい故郷のような存在。厳しい現実にも関わらず、たくましく、ユーモアがあって、いつも私を元気づけてくれます。

植林 OISCA とともに (2010 年 )



# 養殖

## 小さな変革を起こすため 現地の人に寄り添い続ける

## 筒井哲朗

Profile

Tetsuro Tsutsui

職種：養殖
隊次：昭和 61 年度 2 次隊
任地：コミラ
配属先：バングラデシュ農村開発アカデミー (BARD)

### Past

「コミラモデル」と呼ばれるバングラデシュ農村開発発祥の地コミラで、農村開発アカデミー(BARD)に配属。村の協同組合(ショモバイショミティ ) を通じたインド鯉養殖の普及、、組合マネージャーへの研修などを行っていました。

### Present

南アジアの貧しい人々の問題解決に取り組む国際 NGO「シャプラニール＝市民による海外協力の会」（以下シャプラニール）の事務局長を務めています。シャプラニールは、ベンガル語で「睡蓮の家」。日本国内でのイベントや開発教育、フェアトレードなどを通じてバングラデシュ、ネパールの紹介をするほか、年に数回、出張でバングラデシュを訪れています。

愛・地球博にて (2005 年 )

### 当時の活動

私が赴任する前の 1970 年代後半、「養殖」で活動していた先輩隊員たちは、池でインド鯉を養殖するための種苗（稚魚）生産技術の導入と普及に尽力していました。バングラデシュに生息するルイやカトラといった魚は、河川でしか産卵しないからです。そして 1986 年に私が赴任した時点で、鯉の種苗を生産する技術は民間の人たちにもかなり定着していたので、私は孵化した稚魚をさらに育て、鯉の生産量を上げることを目的に活動することにしました。ただ、養殖を始めるには様々な設備投資が必要だったり、池の共同管理者の同意を得なければならなかったりと条件が厳しいことに加え、始められても鯉が盗まれたり、嫌がらせで池に農薬を入れられたりとトラブルがつきものです。

### 乾季を利用した新事業

養殖用の池には、稚魚を食べてしまう捕食魚というものがいて、これが養殖する上での障害となっていました。このための対策として、乾期にデモンストレーション用の池を干し上げて捕食魚を駆除、池の水は灌漑用に利用し、池底では野菜や稲を栽培するという事業を始めました。日本には、田んぼの中で魚を飼う稲田養殖がありますが、これは池中稲作。発想を転換し、この事業の普及に努めました。ただ、二年間の任期の中でこれを試すチャンスは 1、2 度しかないわけですから、技術移転から定着までを見届けるのはなかなか難しいですよね。

### サイクロンがもたらした転機

任期終了後は、配合飼料メーカーの新規事業として始まった水産事業部に入社しましたが、3 年後の 1992 年に休職。前年に起きた、13 万人を犠牲にしたサイクロンの被害状況を調査するため、再びバングラデシュを訪れることに。現地には 1.5 カ月滞在しましたが、そこでの現地の NGO ワーカーとの出会いが、私の人生を変えました。当時はみな生きていくだけで精一杯。バングラデシュの将来に対して、夢も希望も持てない状況でした。そんな状況にも関わらず、国の発展のためにと、強い志を持って働く彼らを見て感銘を受け、「こういう人と一緒に仕事ができたら」と思ったのです。

### NGO 職員として バングラデシュに寄り添う

その後、メーカーを退社し、シャプラニールに職員として参加。サイクロンの災害リスク軽減活動、家事使用人として働く少女たち、障害者、少数民族の支援のほか、現地の手工芸品の輸入販売（フェアトレード）事業などを統括しています。そんな私にとってのバングラデシュは「師」。生きることに一生懸命なたくさんの人たちとの出会いが、本当の豊かさとは何なのか、人生をどう生きるべきかといったことを私に教えてくれるのです。

沖縄県平和記念資料館にてシャプラニールが「沖縄県平和賞」受賞

# 文化

## 私を魅了したバングラデシュ文化を解き明かすために

## 高田峰夫

Profile

Mineo Takada

職種：文化人類学
隊次：昭和 63 年度 1 次隊
任地：コミラ
配属先：バングラデシ農村開発アカデミー（BARD）

### Past

バングラデシュの農村発展のモデル開発を主な目的としたBARDで、独自の農村調査を実施。その後、農村から都市への出稼ぎ労働者、彼らが集中するインフォーマルセクター *、彼らが暮らす都市のスラム、出稼ぎ労働者同士の繋がりなどを対象に調査を行いました。

* 公式に記録されない経済部門

### Present

広島修道大学人文学部人間関係学科において教授を務めています。バングラデシュの研究機関の終身会員にもなっているので、年に一度はバングラデシュを訪れ、情報交換や資料収集を行っています。また、タイに暮らすベンガル・ムスリム子孫の調査も進行中。バングラデシュの社会の変化を自分の目で見ることに面白さを感じています。

↑聞き取り調査の相手

### 当時の活動

今から約 25 年前、BARD の調査部で「現地の研究員とともに調査を実施しながら、調査技術の移転を行う」という要請で派遣されましたが、研究所長の交代による方針変更のため、カウンターパート（技術やスキルを伝える相手）不在の状態で活動をスタートすることになりました。調査を進める中で、現地のムスリムの人たちと付き合うようになったのですが、彼らの生活や宗教観は自分のものとは大きく違っており、単純に面白いなと思い始めたのです。正直に言って、彼らがなぜ、あれほどイスラームを信奉できるのか、純粋に不思議でした。しかも、イスラームの聖典クルアーン（コーラン）は、外国語である古典アラビア語で書かれているのに。また、バングラデシュの少数民族を含むマイノリティ集団を多数知るようになって、彼らの生活にも興味を持ちました。

### 恩師の死により訪れた転機

そんな私に転機が訪れたのは、派遣されて約 1 年が経った頃。旧知の先生が、バングラデシュでの現地調査中に亡くなるという出来事があったのです。私は帰国後、その方から指導を受ける予定でした。彼の研究には敬意を抱いていたのですが、自分が現地で調査を進めるうちに疑問も浮かんできました。そして、「彼が描いていたバングラデシュの社会像とは異なる、自分独自の社会像を描き出したい」と考えるようになったのです。

### 新たな決意

任期終了後は、所属していた大学院を修了し、複数の大学での非常勤講師を経て、現在の職場に就職。教育活動を行う傍ら、研究のために毎年バングラデシュを訪問し、2000 年からは 1 年間の長期滞在もしました。当時、ムスリムの文化を理解するためアラビア語の勉強も始めたのですが、それによって彼らとより深い交流ができるようになりましたね。これまでは「外国人、非ムスリム向けベンガル語」で話しかけられていたのが、急に「ムスリム版ベンガル語」を使って話しかけてくれるようになったのです。バングラデシュと関わり始めてから、実に 10 年以上が経ってからの出来事でした。それと同時に、彼らのことをきちんと理解するため、もっと真摯にバングラデシュ社会と向き合わなければとも思うようになりました。

ネパール系の方々にインタビュー

### バングラデシュと一生付き合っていく

2005 年にバングラデシュのムスリム社会に関する研究で慶應義塾大学より博士号を取得し、翌年には、『バングラデシュ民衆社会のムスリム意識の変動 - デシュとイスラーム』という本を刊行。そこから、ムスリム社会だけでなく都市、災害とテーマを広げつつ、バングラデシュについての研究を続けています。そんな私にとってのバングラデシュは、自分の第 2 の故郷であり、いつも気になる、かけがえのない存在。これからも終生関わってゆくのだろうなと思っています。



# 手工芸

## 田中優子

## 運命の糸に引き寄せられ バングラデシュとともに生きる

Profile

Yuko Tanaka

職種：手工芸
隊次：平成 3 年 2 次隊
任地：ダッカ
配属先：バングラデシュ農村開発局（BRDB）

### Past

農村部の女性が、複数の手工芸隊員から技術指導を受け、制作した手工芸品を、ダッカにある BRDB 傘下の手工芸品店で販売し、彼女たちの収入に繋げる活動を行っていました。

### Present

元バングラデシュ隊員の夫と共に、二人の子どもを抱える主婦として、生活者の目線から激変するバングラデシュでの生活を楽しませてもらっています。通訳やお客様の案内など、不定期に伴侶の仕事を手伝ったりもしています。

シャプラニールの家事使用人プロジェクト

### 当時の活動

今から 20 年ほど前に青年海外協力隊を志した時、バングラデシュは視野になく、中南米に派遣されてスペイン語ペラペラになるつもりでした。しかし合格通知にあったのは「派遣国：バングラデシュ」の文字。そして、農村女性の収入向上を目的に、村で生産された手工芸品を販売する店舗の運営に携わることになりました。当時は同じ配属先に 10 名前後の手工芸隊員が派遣されていて、技術指導をしながら販売ルートも探していたのですが、都市部と農村部での経済格差とそこから生まれる趣向の違い、安定的な販売網の確保などに、みんな頭を悩ませていました。そこで生まれたのが、手工芸品店「カルポリ」で、私は任期中、国内各地の手工芸隊員のアンテナとして、商品デザインから各隊員が指導する多様な技術を組み合わせた商品開発、ダッカで集めた市場情報の生産地へのフィードバック、陳列・接客態度などを含むスタッフ教育や店舗経営への助言などを行いました。

### 国際協力の道へ

1993 年冬に帰国し、協力隊参加のために休職していた職場（製造業の事務）に一旦戻りましたが、国際協力の現場を再度目指したいと思い、退職して大学に編入。国際経済を学ぶ傍ら、NHKラジオ・ジャパンのベンガル語番組制作補助のアルバイトもしていました。卒業後は国際赤十字からの派遣で、バングラデシュと国境を接するミャンマーでロヒンギャ帰還民他の生活向上に 3 年間従事。それから、日本赤十字社本社で 9・11 空爆後のアフガニスタンでの病院復興支援などを経て、元バングラデシュ隊員と結婚しました。そして、長男を出産したのち、夫の仕事の関係で再びバングラデシュへ戻ることになりました。

### NGO での勤務、そして伴侶の起業

バングラデシュ滞在中に、国際 NGO「シャプラニール＝市民による海外協力の会」に勤務することになり、ダッカ事務所長として、現地パートナー NGO とともに家事使用人の女の子たちやストリートチルドレンの保護、地域防災、農村開発などの事業を統括しました。任期中に長女を出産したので 2 年弱で同職を退任しましたが、夫がバングラデシュで自営業（日バ間の輸出入事業）を立ち上げたため、引き続きバングラデシュに滞在しています。

### 何かに引き寄せられるように

こうして見ると、協力隊参加以後の人生の大半バングラデシュと関わっていますが、実は「バングラデシュで働く」ということに強いこだわりを持っていたわけではありません。でも、何かに引き寄せられるように、気がついたらバングラデシュに関わっていたという感じです。そんな私にとってのバングラデシュは、少し屈折した愛着というのでしょうか。パーフェクトとは思っていないんだけれど、他人に悪く言われると面白くない、身内のような存在かもしれません。

NATIONAL STAFF INTERVIEW

National Staff Interview

# ベンガル人スタッフが語る JICAボランティア40年の軌跡

バングラデシュへのボランティア派遣は、独立2年後の1973年から始まりました。以来40年に渡り、農業、農村開発、教育、保健、職業訓練、スポーツ等幅広い分野で活躍しています。彼らがどのような活動をし、バングラデシュの人の暮らしにどのように貢献しているのか、隊員を支えてきた現地職員に話を聞きました。

***Ms. Genevieve Mercer***

1976 年より所属、36 年にわたりボランティア事業に関与。

Ms. Genevieve Mercer

***Mr. Zulfiker Ali***

1982 年より所属、ボランティア事業へは 1982 年から 1992 年まで携わる。

Mr. Zulfiker Ali

***Mr. Sayedul Arefin***

1988 年より所属、1988 年から 1991 年、そして 2012 年から再びボランティア事業に関与。

Mr. Sayedul Arefin

***Mr. Shar Md. Zahid Hossain*** (司会進行役)

2010 年より所属、ボランティア事業を担当。

Mr. Shar Md. Zahid Hossain

Z 過去 40 年を振り返って、ボランティアはどのような活動をしてきたのか、聞かせて下さい。

S 派遣が始まった頃は多くの餓死者が出るほど食糧事情が非常に悪く、農業関連の派遣が主でした。

A これまで伝統的な農業が行われていたバングラデシュでは、単位面積当たりの収穫量に限度がありました。そこでボランティアは、土づくりから栽培方法の伝授、入手しやすい工具を使った農業機械による耕作など農業全般の指導を行いました。また、より収穫の多い品種や味の優れる品種の導入により、バングラデシュの農作物の種類を充実させ、収穫率を大きく改善することにも貢献しました。

G 現在、市場に出回っている大ぶりのキャベツやダイコン、甘いスイカはボランティアがもたらしました。また、マッシュルームを初めてバングラデシュに持ち込んだのも彼らでしたね。

Z 当時は食糧不足が深刻であったため、政府の要請も高かったでしょう。農村開発局には述べ 70 名ものボランティアが派遣されていますが、どのような活動をしていたのでしょうか。

S 女性の収入向上を目指し、被服、手工芸品作りへの指導、農業指導がされました。デザインを一新、製作指導だけでなく販売にも関与し、販路の 1 つとして手工芸品店カルポリ (*1) が設立されました。

G 新しいデザインは国内のファッションショーで何回も優勝しています。現在見られる人形やぬいぐるみはボランティアより紹介されたものですし、廃品を利用してココナッツボタンを作ったのも彼らです。

Z それ以外の分野ではどのような活動をしていたのでしょうか。

S ボランティアを職業訓練所へ派遣し、機械、電気、配管、自動車整備などの指導を始めたのも日本が最初です。訓練を終えた半熟練工の中には海外で就業する機会を得る人もいました。

A 政府からの要請に素早く対応し、10 種以上のいろいろな分野で技術指導をしています。最近はIT分野への指導も盛んです。

Z 保健分野でもいろいろな活動を展開していますね。

A 1980 年頃から看護師や医療技術者の病院への派遣が始まりました。医療機器等の提供も援助により行われました。

G 集中治療室での看護の改善にはボランティアの指導が大きく影響しており、当時は彼らのカウンターパート（*2）の多くが日本で研修を受けました。どの分野でも言えることですが、まずボランティアが開拓し、そのカウンターパートが日本で研修することでさらに大きな成果が得られています。

Z 保健分野では90年代後半より草の根レベルでポリオ (*3) 対策や予防接種事業にも取り組んでいます。2004年からはフィラリア (*4) 対策も行っています。

S 80 年代は肺結核対策も行っていました。

A 医療検査ボランティアが市販の小児用シロップ剤への異物混入が原因で腎臓病を発症していた例を見つけたこともありました。

S 90 年代初めの頃、検査では何の問題も見つからないのに元気がない子供たちに対し、精神的な問題を指摘し、観劇などのレクリエーションを通して改善していったこともありましたよね。

Z 教育分野への貢献はどうでしょうか。現在は JICA の案件事業「初等教育プログラム（*5）」にも係わって、案件を支える重要な役割を担っています。

A プロジェクトの前から理数科に関して教師への指導をしています。長年に渡る活動が就学率や修了率の向上に繋がっていると言えるでしょう。JICA の案件に大きく係わっているものにダッカ廃棄物管理事業もあります。

S スポーツ分野へも数多くのボランティアが派遣されていますが、スポーツを通じて、地道な努力が成功に繋がるという意識や価値観が広がっています。

G 国際大会などで入賞することで自国への誇りも強く持てるようになります。空手や柔道を始め、水泳やテニス、サッカー等々、種目も多いですよね。

S ボランティア事業はインフラ整備事業ではありません。人間開発や社会開発事業であって、草の根レベルから働きかけます。最近は中央政府にまで大きく係わり、人々の暮らしを改善していると言えるでしょう。

Z ボランティアが地元の人と一緒に汗を流しながら活動することで、人々の意識改革が起こります。40 年間の活動の積み重ねが大きな成果につながっているのですね。彼らの活躍は日バの友好関係にも深く関与しているといえましょう。このような活動をしているボランティアをサポートできてうれしいですね。

*1 カルポリ：1989 年に JICA の技術的、金銭的な援助により建てられたバングラデシュ農村開発局 (BRDB) 傘下の手工芸品店

*2 カウンターパート：技術やスキルを伝える相手

*3 ポリオ：ウイルスの経口感染により主に手や足に麻痺が起きる病気

*4 フィラリア：蚊が媒介し、リンパの浮腫や象皮病などを引き起こす病気

*5 初等教育プログラム：国立初等教育アカデミー (NAPE) 及び教員訓練校 (PTI) 等を対象として、理数科教育の改善を目指す。派遣中のJOCV（小学校教諭）とも協力し、学校現場での教育の質の改善も目指している。

Ms. Genevieve Mercer

Mr. Zulfiker Ali

Mr. Sayedul Arefin

Mr. Shar Md. Zahid Hossain

# 隊員の一日に密着

## 古賀 三千香（こが みちか）

平成 23 年度 4 次隊
職種：環境教育
（担当地区 Dhaka South City Corporation Zone5　saydabad 周辺）

Dhaka

**7:00**
起床、準備

**8:00**
巡回を兼ね、歩いて担当地域のオフィスへ
清掃員に会うと立ち止まって彼らの話を聞きます。カウンターパート（CP）の清掃監視員と朝ごはんを食べることも多いです。メニューはもちろんベンガル料理。

**10:00**
オフィスで活動について話し合ったり、地域を巡回したりします。

**11:00**
CP の上司がいる別のオフィスへ。仕事の状況把握や提案をします。

**13:00**
近くのベンガルカレー屋で昼食。カレーがすっかり好物に。

**14:00**
徒歩とバスで本部オフィスへ。事務作業や上司への報告などやることはたくさん。
小腹がすいたら屋台へ GO。

**17:00**
ローカルバスか徒歩で帰宅。途中、市場で買い物をすることも。

**18:00**
入浴、夕飯の準備。食事は、近所の家で食べさせてもらうこともしばしば。
夜、突然隣人が訪問してきて話し込んだり、なんていうことも結構あります。

**23:00**
就寝

**8:00**
起床

## 金宮 剛（かねみや ごう）

平成 23 年度 2 次隊
職種：小学校教諭
（ボリシャル県アゴルチャラ村）

Barisal

**8:30**
ホームステイ先のおばあちゃんと、ベンガル料理の朝食。

**9:00**
オフィスへ。キリスト教の学校なので一緒にお祈りもします。

**9:30**
バイクで学校の巡回開始。呼び止められて話し込むことも。

**9:45**
途中、行きつけのチャドカン（お茶屋）で、村人と雑談しながら一杯。

**10:00**
配属先の小学校での活動。子どもたちのために頑張ります。

**13:30**
帰り道、学校近くのチャドカンで一杯。

**14:00**
自宅で昼食。メニューはもちろんカレー。

**15:00**
オフィスで同僚と話しながらベンガル語を勉強したり、読書をしたり。

**17:00**
村の仲良しの友達と、行きつけのチャドカンか近所のお気に入りスポットへ。

**18:00〜19:00**
ひと眠り

**19:30**
夕食（昼のカレーの残り）

**20:00**
読書、一人反省会、メールチェックなど

**24:00**
就寝

# JICAボランティアの現在（いま）

## 主要セクター別ボランティア活動紹介

## 環境教育

**奥 美由紀**（任期延長）
平成 22 年度 3 次隊
任地：ダッカ
配属先：ダッカ北＆南市役所

「住民参加型廃棄物管理の促進」に向けて、カウンターパートとともに、廃棄物管理の環境整備（ハード）と、住民の廃棄物管理への意識を高める啓発活動（ソフト）の両面で活動を行っています。具体的には担当地域における廃棄物収集の運搬に関する改善、学校や地域における環境教育の実施、大学をはじめ他団体との連携活動、また、イベントを含めた広報活動などを行っています。道路、溝、どこへでもゴミを捨てることが自然な行為であるバングラデシュ。とりわけ人口 1,500 万人超と言われるダッカ市において、住民参加型の廃棄物管理を促進することは、住民の意識改革はもちろんのこと、様々なステークホルダーが絡んでくるので、非常に難しい活動です。しかし一方で、小さな行動や少しの改善が目に見てわかるので、非常にやりがいも感じています。これからも、ダッカ市の未来を担うカウンターパートとともに、住民をはじめ様々なステークホルダーと相互協力し合っていけるよう、人と人を繋ぎながら活動をしていきたいと思っています。

### 同僚からの一言

**Mr. Md. Mofizur Rahman Bhuyan**
役職：清掃オフィサー
所属：ダッカ北市役所 Zone2

奥さんは毎日バスで自宅 ( オールドダッカ ) とフィールド ( ポッロビ ) を往復し、住民に溶け込み、同じように笑ったり食べたりしながら、常に私達と共にフィールドで活動してくれています。そんな彼女に対して、バングラデシュ人としてとても感謝しています。

## 村落開発普及員

**田中 啓子**（2013 年 1 月帰任）
平成 22 年度 3 次隊
任地：タンガイル
配属先：バングラデシュ農村開発局（BRDB）

私は二年間、JICA の「参加型農村開発プロジェクトフェーズ 2(*1)」に基づき、リンクモデル普及のためにユニオン開発官（UDO）と呼ばれる同僚と共に活動してきました。バングラデシュの農村部では、農業支援や各種補助金の給付といった地方行政サービスが住民に行き届いていないといった現状があります。現在、末端行政レベルの市（ユニオン）において、毎月ユニオン評議会（UCCM）が開催されているのですが、各省庁の普及員の参加率が低かったり、議論が感情的になって途中で中断したりと問題も多いです。そうした問題を解決するためにUDO と共に呼びかけを行ってきたのですが、初期の頃より村の現状を良く知る公務員が多くなったり、どのようなサービスが受けられるのかを知る村人が多くなったりしたように感じています。今後リンクモデルの普及がさらに進むことで、無い、無い、無いと無いことの多いバングラデシュ村落部行政サービス提供の現場から、「無い」のその言葉が少しずつでも聞かれなくなることを願います。

### 同僚からの一言

**Mr. Kali Krisna Paul**
役職：ユニオン開発官
所属：バングラデシュ農村開発局（BRDB）

これまで約 7 年間 JICA ボランティアと一緒に仕事をしてきて、沢山のこと学び、色々と発見することがありました。私自身や村人たちのモチベーションも上がるし、楽しいです。時間を守ることに対する厳しさや勤労さは、私が彼らから学んだことの一つです。

*1 Participatory Rural Development Project Phase 2（PRDP-2）：縦と横の結びつきを強化し、村落住民に対して適切な行政サービスを提供するための仕組みである「リンクモデル」を定着、普及させることを目的とした技術協力プロジェクト。2005 年 4 月から約 5 年間行われ、現在はボランティアのみが草の根レベルの活動を行っている。

*2 Teaching Package：JICA の技術協力プロジェクトが国立初等教育アカデミー（NAPE）とともに制作した、算数、理科の教員用参考書。

## 小学校教諭

**小谷 優佳**
平成 23 年度 1 次隊
任地：ガジプール
配属先：ガジプール初等教員訓練校（PTI）

私は PTI において、理数科の「授業の質の向上」と「指導案集：TP(*2) の普及」を目的に活動を行っています。具体的には、訓練生（小学校教員）向けに、TP を参考にした教授法の授業と、教育実習の巡回による授業改善への助言を実施、また PTI 付属小学校の教員向けには、授業改善への助言を行っています。訓練生が対象となる TP を参考にした教授法の授業では、どのような質問を子どもたちに投げかけたらいいのか、また、何を使えば分かり易く説明できるのかを考えてもらい、訓練生が子どもたちの視点に立って授業ができるよう教えています。また最近、PTI 付属小学校の教員に対しての授業改善には特に力を入れていて、授業前後の15分間を 教員たちと共有し、授業研究を行っています。残り数カ月の活動も、今の取り組みを続けていくつもりです。それにより、バングラデシュの将来を担う子ども達が自分たちで考え、発見し、問題解決していくスキルを身につけられるような授業を目指し、カウンターパートたちと共に切磋琢磨していきたいと思っています。

### 同僚からの一言

**Ms. Hasina Afrin**
役職：PTI 教員（算数）
所属：ガジプール初等教員訓練校

日々の話し合いを通じて、小谷さんと一緒に授業を作っていくのがとても楽しいです。小学校の先生達が子供達に分かり易く授業するにはどうしたらいいのかについて分かりやすいアドバイスをくれ、とても参考になります。今後も、彼女とともにバングラデシュの教育の質を改善していきたいです。

## テニス

**小野 加寿也**
平成 23 年度 3 次隊
任地：サバール
配属先：バングラデシュ国立スポーツ学院（BKSP）

私の配属先である BKSP は、将来、オリンピックや国際大会等で優秀な成績を収められるような、バングラデシュの代表選手を育成するために作られた機関です。私は現在、男子のトップチームである 8 名の生徒達を指導しています。ジュニアナショナルチームに選ばれている生徒もおり、海外遠征に行く機会もあります。私は、他の国に遠征に行く機会がある彼らだからこそ、他の国でプレーした際にバングラデシュ代表選手として恥ずかしくない選手になって欲しいと思い、毎日、選手一人一人と向き合っています。これまで、数名の選手が、練習や試合で上手くいかないことがあると怒って投げ出したりして叱ることもありましたが、そうした選手が試合中に諦めることなく勝利した瞬間は嬉しかったです。スポーツから学べる事はとても多いです。バングラデシュの若者がスポーツを通して、フェアプレー、スポーツマンシップ、そしてすぐに諦めるのではなく努力する事の大切さなどを学ぶことで、バングラデシュのさらなる発展に繋がっていくと期待しています。

### 同僚からの一言

**Mr. Rokonuddin Ahmed (Rokon)**
役職：テニスヘッドコーチ
所属：バングラデシュ国立スポーツ学院（BKSP）

BKSP のテニスチームに JICA ボランティアが派遣されて今年で 14 年目になりますが、私も生徒達も、日本人のコーチからたくさんのことを教わってきました。いつも全力でこの国のテニスの発展・強化の為に活動しているボランティアの方々に感謝しています。

*3 Safe Motherhood Promotion Project Phase 2（SMPP-2）：母子、新生児の保健改善支援を目的とした技術協力プロジェクト。フェーズ 2 は 2011 年 7 月に開始。

*4 カイゼン：継続的な取り組みにより業務プロセスを改善していく、従業員参加型の手法。

*5 Total Quality Management（TQM）：病院管理・改善のための総合的な品質管理手法。

*6 蚊が媒介し、リンパの浮腫や象皮病などを引き起こす病気。

*7 Information Technology Engineers Examination：1969 年に日本で始まった、情報通信技術に関する唯一の国家試験。日本のみならずアジア 11 カ国に広まっている。

# 看護師

## 高橋 理恵

平成 23 年度 4 次隊
任地：ジョソール
配属先：ジョソール県保健衛生事務所

私は現在、JICA が進める「母性保護サービス強化プロジェクトフェーズ 2(*3)」と連携を図りながら、病院において日本型品質管理手法である「5S（整理、整頓、清掃、清潔、しつけ）、KAIZEN(*4)、総合的品質管理手法 (*5)」のアプローチを行い、医療サービスの質の向上を目指すための活動に取り組んでいます。主な要請内容は現場スタッフの職場環境の改善ですが、患者さんに対して目線を向けることも忘れてはいけない活動の一つであると思っています。ここ、バングラデシュに来て「生」と「死」を本当に身近に感じることが多い中、「Quality of life（生活の質）」の観点から考えさせられることが非常に多くあります。どのような場所で生まれ、育とうと、それぞれが Quality of life を追及する権利はあるはずです。環境は人の心に大きな影響を与えますが、その環境をつくるのもまた人です。残りの任期も約 1 年となり、私にどこまで出来るかはわかりませんが、患者さんの Quality of life の向上にふさわしい環境を提供できるよう、今後現場スタッフとともに切磋琢磨していきたいと思っています。

### 同僚からの一言

**Dr. Salahuddin Ahmed**
役職：県病院長
所属：ジョソール県病院

高橋さんが日本から来てくれたおかげで、5S 活動が順調に進むようになり、病院スタッフのモチベーションも向上したと思います。彼女は、ジョソール県病院スタッフにとって家族の一員のような存在で、とても誇りに思っています。

# 感染症対策

## 佐野 加奈

平成 22 年度 4 次隊
任地：ラルモニルハット
配属先：ラルモニルハット県保健衛生事務所

私はフィラリア症 (*6) の撲滅のため、重度感染地域にて感染症対策隊員として活動しています。具体的には、フィラリア症について知ってもらうための地道な啓発活動、患者さんのケアに関わる活動、駆虫薬集団一斉投与キャンペーン（MDA）と小学校で駆虫薬を投与するキャンペーン（STHC）の支援に関わる活動を行っています。特に、MDA の支援には力を入れ、夜間上演会やマイキングに加え、今年は TV やラジオといったマスメディアを巻き込んだ啓発活動を行いました。その結果、普段軽視されているフィラリア症への関心が高まったように感じました。ただ、すでにフィラリア症を発症している患者さんへのケアは今後も課題です。フィラリア症の悪化を防ぐためのセルフケアは結果が見えるまで時間がかかるため、その必要性を理解してもらえず苦労しています。それでもバングラデシュのフィラリア対策は、現在で 4 代に渡る JOCV の派遣の成果もあり、撲滅に近づいてきています。これからも、隊員の活動がフィラリア症の撲滅への一助になることを願っています。

### 同僚からの一言

**Dr. Md. Jahangir Alam Sarker**
役職：県保健衛生事務所長
所属：ラルモニルハット県保健衛生事務所

佐野さんは、MDA と STHC の 2 つのキャンペーンに関わる支援に加え、様々な保健プログラムにも参加してくれています。彼女のようなボランティアたちの活動によって、私やヘルスワーカーは良い方向に発展していると感じ、感謝しています。

# コンピュータ技術

## 米山 信介

平成 22 年度 2 次隊
任地：ダッカ
配属先：バングラデシュコンピュータ評議会 (BCC)

赴任当初、私はボリシャルの学校の PC コースの先生に対して、授業内容へのアドバイスを行ったり、ハードウェアのメンテナンスを行ったりしていました。しかし、日本の ICT（情報通信技術）の技術者としてバングラデシュにどのような貢献ができるのかを考えた結果、情報処理技術者試験である ITEE(*7) の導入にたどり着き、現在の配属先で活動を行うことになりました。バングラデシュには現在、IT 技術者のスキルを証明するための国家試験が存在しません。ITEE はアジア各国の試験制度と相互認証を行っているため、一度 ITEE に合格すれば他の国でも通用する人材として認められ、バングラデシュの技術者の雇用機会が広がる可能性もあります。また、ITEE は国家試験のため受験料が安価で、より多くの人が受験できます。私の任期は残りわずかですが、引き続き ICT 企業、大学、専門学校等への ITEE の啓発活動に注力します。なお、ITEE 導入のための JICA プロジェクトが、2012 年 12 月から正式にスタートしたので、これから本格的な導入へ向けて、バングラデシュ側と日本側で進めていく予定です。

### 同僚からの一言

**Mr. Md. Rabiul Islam**
役職：首相府システムアナリスト
所属：バングラデシュコンピューター評議会

バングラデシュの発展のために働いてくれる米山さんにとても感謝しており、一緒に仕事が出来ることを、とても誇りに思っています。これからも JICA の協力は必要ですが、私たち自身も一緒になってもっと努力をしていかなくてはならないと感じています。

# 品質管理

## 藤田善昭（シニアボランティア）

平成 23 年度 2 次隊
任地：ダッカ
配属先：工業技術振興センター (BITAC)

私は現在バングラデシュ国工業省の機関の一つである、工業技術支援センター（BITAC）にて『生産活動のカイゼン』を紹介・指導をしています。全国に 5 拠点ある当センターに対してカイゼンの考え方及びその実施を具体的に指導し、将来 BITAC 技術者がその技術を彼ら自身にて広く民間セクターに広めて頂けるように活動しています。カイゼンの基本となる『5 S 活動（整理･整頓･清潔･清掃･しつけ）』から開始して、現時点では同センターの生産活動全体の効率化カイゼンについて取り組み中です。また同時に BITAC 技術者と共に、民間セクターの機械加工及び鋳物業界へもカイゼン指導を開始しています。このようにバングラデシュの技術者・管理者がカイゼンの技術をマスターして、この国の製造技術力を向上させることで、世界的水準と遜色ない競争力のある製品の生産が可能となり、日本企業への貢献も含め広く世界的な貢献ができるようになることを期待しています。また、これらの発展は同国の人々の就業の機会も増やすことになり、健康的で心豊かな生活につながると確信しています。

### 同僚からの一言

**Dr. Md. Ihsanul Karim**
役職：ディレクター
所属：工業技術振興センター

日本独自のカイゼン活動は、生産性を向上するという点で、バングラデシュの様々な業界でとても役に立ちます。藤田さんはカイゼン活動を広めるためとても熱心に取り組んでおり、今後製造業など新たな分野でもこの活動を広めていって頂けることを期待しています。

# これからの未来に向けて

派遣前に語学を含む訓練を受けてきた JICA ボランティアは、赴任当初より地域の人たちと同じような生活を送り、同じ言葉を使って活動します。2年間の任期中、慣れない環境や文化の違いに悩みながらも地道な取り組みを続けることで、地域住民との信頼関係を築き、それによってたくさんの「小さな成功」を積み重ねてきました。
また、バングラデシュの地域住民と同じ目線で活動に取り組む隊員からの意見は、他の JICA 事業に活かされたり、バングラデシュ政府の制度改革などにも影響を与えてきました。

こうした取り組みの一つ一つは、バングラデシュの経済的、社会的な発展だけでなく、日本とバングラデシュの友好関係の深化にも大きく貢献しています。さらには、バングラデシュで培った「国際的視野」や「現場力」を活かし、日本を元気にする人材として活躍しています。

今後も、JICA ボランティア事業が両国の発展に寄与し、良好な関係の強化に繋がるよう取り組んでいきます。

JICA VOLUNTEER
BANGLADESH

7 色の中で唯一交わる赤と緑は、日本とバングラデシュの友好を表しており、両国の国旗の共通色である赤がボランティアの「V」を形作っています。また、「40th」という数字に向かって虹が伸びていくことで、過去から現在までの時間の積み重ねと、今後、共に築き上げる明るい未来を表現しています。

Japan International Cooperation Agency
Uday Tower(7th Floor), 57&57A, Gulshan Avenue(South), Circle-1, Dhaka-1212, Bangladesh
Tel:(880-2)989-1897 Fax:(880-2)989-1689
E-mail: bd_oso_rep@jica.go.jp
URL: http://www.jica.go.jp/bangladesh